

大会テーマによせて

高橋益代

今回の愛知大会では「文書館制度の拡充をめざして—史料保存のネットワーク」を大会のテーマに置くという。これはまことに時宜をえた提言であると思う。

全史料協は誕生から16年、この間1987年にはまださまざまな問題を積み残しているとはいえ「公文書館法」という法的認知を受け、1989年から3年間は集中的に「地域の中の文書館」を見つめつけてきた。この“地域”の意味するところをめぐってはいろいろの見解や解釈があり、活発な議論が続けられてきている。

今年の大会テーマはこれまでの運動をさらに深めた議論になるであろう。史料保存というテーマは文書館活動のすべてを総括している表現である。

〈保存〉の問題は、(1)何を(対象)、(2)何処に(場所・施設)、(3)どのように(修補)と考えることが出来る。史料の保存という課題については、近世前の史料の分野では、従前より個々の史料に対する虫損やかび対策等斯界では当然の技術が開発され、継承されてきている。しかし一方近代文書については、酸性紙問題がジャーナリズムでクローズアップされるまでは未処理で放置され、話題にもされていないのではなかろうか。酸性紙問題が騒がれてからも既に久しいが、近代文書の手当はやっと一部が始まったというのが現状であろう。

全史料協の分科会(?)の形で「記録史料の保存を考える会」が発足して約1年になる。史料の所蔵機関として無視は出来ないと思われる大学図書館をかかえる文部省も保存の問題にやっと気付いてきた気配がある。日本でも《保存の理論》が科学として認識され始めたのだろうか。

これまでは技術、端的に言えば職人芸的な技術の段階の個々の保存技術が「保存論」の大勢をしめてきていた。それがやっと総体としての保存理論が登場し、環境論がテーマになってきている。これをさらに進めて環境論を施設論だけに留めず、総体の保存論として史料を地域

(社会)の共有の資源として認識し、把握するように進めなければ保存論は完結しないと思う。

地域のネットワークには3つの柱が考えられる。

1. 保存技術情報のネットワーク
2. 保存情報(史料所在)のネットワーク
3. 行政・民間(企業・個人)の統一的ネットワーク —相互のサポート関係—

1は言わずもがな、2・3に関して多少言及すれば、地域研究の基礎として史料を捉えるならば一史料群、たとえば家文書ばかりでなく、公文書や企業・組合の史料も駆使しなければ地域全体の姿は見えてこない。

記録史料は本来その生み出された場所において一群のものとして保存されるのが一番望ましいとされている。しかし既に一家離散の運命に遭遇して仕舞ったものは、その所在の情報を集め、情報の上で史料群としての像を復元させること、それを通じて自ずと“課題別”という面も把握され易くなるであろう。

地域史料情報のネットワークにおいて、国立史料館を中心にすすめられてきた「史料所在情報のネットワーク」は今春『近世・近代史料目録総覧』として結実した。文書保存機関としての公的機関—県・市町村—のネットワークは現在各地で県文書館を中心にすすめられつつある。史料所蔵者の意識の改革という課題も古文書講習会等による啓発その他で少しずつでも進んでいるのではないだろうか。

しかしながら、一方史料の所蔵機関としての大学・企業の文書館運動への取り組みは手付かずに近いのでは…昨年の大会で大学史料館も文書館の一部であるという意見が表明されたが、個々の一大学の大学史料ばかりでなく、大学の所蔵する文書群・史料群の情報・保存運動へも全史料協として大いに発言していく道はないものであろうか。

研究者が史料のブックワシ屋だった時代はもう終わっただろうか。古書店が史料の解体屋で

今もあることの実態—企業活動を妨害する訳にもいかないであろうが、これも史料群としての保存を考える時、小さいことでも胸病む事柄である。

これらすべて希望のあるところもないところも含めて〈地域〉のネットワーク—情報の、人のネットワークは、これからの大いなる課題であろう。
(一橋大学経済研究所)